

横を流れる筑後川の河川敷に沢山のつくしが顔をのぞかせ、久留米市内の多くの桜の木には、つぼみのはち切れそうまでに膨らんで明日にでも花を咲かせようとしています。早春のこの佳き日に多数のご来賓のご臨席を仰ぎ、本日ここに令和4年度の久留米工業高等専門学校の卒業式ならびに同校専攻科修了式を挙行できますことを、卒業生・修了生はもとより本校教職員一同まことに光栄に存じます。ご参列をいただきましたご来賓の皆様には厚く御礼を申し上げます。

本科の卒業生ならびに専攻科修了生の皆さん、ご卒業・ご修了おめでとうございます。皆さんは、本校が掲げる「自立の精神と創造性に富み広い視野と豊かな心を兼ね備えた社会に貢献できる技術者の育成」という理念に基づいた教育課程を立派に修得されてこの日を迎えました。これまでの5年さらに2年の歳月の間に重ねてこられた研鑽と努力に深く敬意を表します。同時に卒業生・修了生の学修と成長を支えてこられた保護者の皆様には、高くかつ離れたところからではありますが、こころより深く感謝を申し上げます。

卒業生・修了生の皆さんは、申すまでもなく15歳からの5年とさらに2年という、青少年から大人に成長していく人格形成の重要な時期をここ小森野キャンパスで同年の級友らと喜怒哀楽を共にしながら勉学に励んで今日を迎えました。昨今、人生100年と言われておりますが、その中での5年や7年は物理的な時間としてはほんの僅かです。しかし、その重みと意義は、皆さんが今思っているより遥かに大きなものであることを、これから歳を重ねるにつれて実感していくことでしょう。本校で過ごした年月とここで培った、人として、技術者としての素養と人脈はこれからの皆さんの人生の基盤となると言っても過言ではありません。

これらを大事にして、これからの人生を豊かなものにしてください。

高等専門学校は今からちょうど 60 年前の 1962 年に、わが国独自の高等教育制度として設立されました。その目的は、学校教育法第 70 条の 2 において「深く専門の学芸を教授し職業に必要な能力を育成すること」とされています。昨年 2022 年は高専制度創設 60 周年でした。

そのため本年度は 1 年にわたって創設 60 周年を記念する様々な取り組みや行事が行われてきました。その中で高等専門学校のこれまでの歩みと発展が総括されるとともに、将来に向けた新たな方向性も示されました。それを端的に表すものが、高専制度創設 60 周年記念のキャッチフレーズです。それは「たゆまぬ挑戦、飛躍の高専！」でした。このキャッチフレーズは奈良高専の学生が作成したもので、まさに高専生全員に当てはまるでしょう。すなわち「たゆまぬ挑戦、飛躍の高専生！」です。

60 周年を迎えて改めて高専の存在と意義が見直されており、高専には今多くの方々から強い関心と期待が寄せられています。それはすなわち、ここにいる高専の卒業生・修了生である皆さんへの大きな期待に他なりません。

皆さんがこれまで受けてきた高専の教育には、一般の高等学校や大学にはない特徴があります。主なものとしては、まずは、15 歳からの 5 年あるいは 7 年間の一貫した高等専門教育であることです。次に講義と共に実験・実習や競技会コンテストなどを多用して工学の理論と実践の両方をバランスさせた実務教育に重点をおいています。しかもこの教育を比較的小人数の 40 人クラスで行うことで学生それぞれの個性を尊重して伸ばすことも挙げられます。さらに、卒業後の進路がさまざまであることも特徴の一つです。これらはそれぞれ独立した

足し算ではなく、互いに相関しあった掛け算となって高専教育を独特の優れた教育制度にしています。このように聞いても高専の中にいた皆さんは人ごとのように思うかもしれませんが、しかし、この制度の中で研鑽を積んだ皆さんが共通して持っている工学技術者としての素養も、当然のことながら高専卒業生に特徴的な優れた面があると言えるのです。これらは皆さんにとっては当たり前に見えることかもしれませんが、実際は必ずしもそうではなくて、一般の大学や高等学校の卒業生にはない優れた素養になっているのです。

もう少し具体的に話しましょう。わかりやすい卒業・修了後の進路についてみると、本科卒業生の半数は就職して実社会で活躍します。残りの半数は専攻科か大学の3年生に進学してさらに専門の教育を受けます。専攻科も同様に就職する人も居れば、大学院に進学する人もいます。一方、普通高校や大学工学部では、ほとんどの卒業生は大学あるいは大学院に進学します。卒業後の進路が画一的ですと、そこでの教育の内容や意義がその後の進路のためになりがちです。学生だけでなく教員も、その後の進路に役立つかどうかという意識や価値判断に知らず知らずに陥ってしまいます。高等学校の特に有名な進学校の教育が、その全てでないにせよ大学入試対策に比重が高まるのは当然です。一方、高専ではそうはいきません。卒業して専門職業人として活躍しようとするものも居れば、大学などに進学する学生もいます。高専で培う専門家としての素養は、就職する学生には先ほど述べた学校教育法で定められているように、職業人として社会での現場で役立つものでなくてはなりません。一方、進学する学生にとってはさらに磨いて高めていく専門の基礎という意味合いが強くなります。目的が一つであればそのために特化することができて効率が良いように思うかもしれません

が、実はそうではなく、目的が一つに絞られない教育とそれによって培われた専門的素養がこれからの時代では非常に重要になってきます。それはなぜでしょうか。

20世紀において人類はそれまでに得てきた科学的知見を基に大きく文明を発達させて、豊かな近代社会を創り上げました。この時は右肩あがりの成長を基軸とするものでしたので、ほとんどの成長において誰にでもわかりやすい目標に向かって追いつけ追い越せの「イケイケドンドン」で進むことができました。そのため高等教育も既成産業の発展を担う人材を数多く輩出することが求められ、その目的や内容は明確でした。

しかし、21世紀に入ると、文明社会の営みによる地球環境への影響や増え続けるエネルギー消費など、文明社会の負の側面が顕になってきました。さらに、情報化社会の発達によって、人類がこれまで長年かけて構築してきた様々な社会システムに大きな変革がもたらされるとともに、生活様式も大きく変わろうとしています。加えて、ここにきて、中国は台湾統一の意欲を強めてきて、ロシアがウクライナに侵攻しているように、第2次世界大戦後やベルリンの壁崩壊後に築かれた世界秩序の綻びが顕になるとともに、人口増加と地球規模の人的交流の拡大によって新型ウイルスなどによるパンデミックの危険性の高まりが人類社会の発展に大きな影を落とすようになってきました。

これから皆さんが活躍する社会の今後の発展・展開は、科学技術だけでなく様々な社会情勢の影響が複雑に加わって、予測がつかない状況になってきています。高度な文明社会を支えて新たな展開を切り開く工学の内容や位置づけについても、今後の展開や発展は同様に予測不能です。そのため、工学の目的や要素技術の使い道が従来のようにはっきりと決まって

なく、時とともに大きく変わっていく可能性が十分にあります。今後の予測が不能な現代の社会において、あらかじめ決められた目標や目的に縛られた価値観は時代に合わなくなってきており、大きく揺らいできています。今正しいと考えられている目標が明日には崩れることあり得ます。そのため、目的が一つに絞られずに培ってきたあるいは具体的な目的のない専門的素養や価値観がこれから重要になってきます。

実はこのような目的が定まらない専門的素養が本当の意味の「基礎」と言われるものです。

「基礎」とはある分野の序の口「入門」とは違います。基礎とは何にでも使える、利用できる知識であり、素養なのです。したがって、人によって「基礎」となる素養は違うかもしれません。それぞれが異なる「基礎」をもつ、これが専門家としての「個性」とも呼べるものかもしれません。

米国西海岸のサンフランシスコの郊外には有名な私立のスタンフォード大学があります。

この大学からはヒューレットとパッカードをはじめとして多くのベンチャー起業家を輩出し、そのためにスタンフォード大学のすぐ近くにアップルやグーグルなど多くの時代の最先端を行く企業が集まるシリコンバレーができました。このスタンフォード大学の知人から聞いたことでは、彼らは先端的と呼ばれる時流の知識, knowledge の賞味期限は 11 か月しかないと考えています。すなわち、今の最先端の知識は 1 年も経てば古くなる、あるいは役に立たなく意味を持たなくなると考えているわけです。時代を切り拓く人材を多く輩出しているスタンフォード大学では、いわゆる現在の先端を追う教育ではなく「基礎」教育を徹底しているのです。これは全く別の意味での「先端」教育ともいえます。

高専ではこれらの専門的「基礎知識」に加えて実務教育にも重心を置いてきました。皆さんは身につけた知識や技術を、目の前にある課題に実践応用する経験を少なからず持っています。応用力、創造力とも言い換えることができます。そのことはこれからの新たな未知の課題と対峙した時に大きな力になるでしょう。このような特徴をもつ高専の教育は今紹介したスタンフォード大学の教育方針に近いかもしれません。これらのことから、時代の先を見据えて変化に対応する力を持った人材を育成する高等教育機関として高専が改めて注目されています。皆さんは高専の卒業生・修了生であることに自信と誇りをもって、いい意味のプライドを前向きに明確に意識してこれから存分に活躍していただきたいと願っています。

ところで、私は校長に着任して以来、これまであまり顧みられていなかった本校の校歌に皆さんが慣れ親しんでもらうよう働きかけてきました。皆さんは5年あるいは7年の長きにわたって本校で過ごして成長しました。それはこれからの皆さんの人生の大きな刻印となっています。校歌は久留米高専生と卒業生全員の時代を越えた共通の合言葉です。校歌を一緒に歌うことによって、同級生だけでなく、初めて会う先輩や後輩ともすぐ気心が知れるはずです。そのことは皆さんの人生を豊かにしてくれるでしょう。今日は福岡の合唱指導者の第一人者である横田諭さんと九大のコールアカデミーをお呼びして、最後にみなさんで校歌を歌ってもらうことにしています。是非とも慣れ親しんでもらって久留米高専卒業生の合言葉にしてください。

卒業生・修了生の皆さん、勉強はこれで終わったわけではありません。むしろこれから学ぶことの方が多いことでしょう。これから先も、くれぐれも健康には留意して、新しいこと

を貪欲に吸収して自らの夢の実現に努力して、世界を相手に活躍されていかれますよう、心より願っております。皆様のご健勝をお祈りいたします。

以上をもって令和4年度の本校卒業式・修了式における校長告示といたします。

令和5年3月16日

独立行政法人 国立高等専門学校機構 久留米工業高等専門学校長

松村 晶